

結びに私事と周辺の事柄を話させて頂きたい。

私は1980年（S55年）生まれです。本年度で32歳になります。昔から「30代は分別盛り」と申しますが、その言葉の意味が朦朧ながら見えて参りました。なぜ、歳を上げるかと申しますと筋道を建てて世代論をしたいからです。

60～80歳代が私の祖父の世代は土地持ちであり不動産所有者が多いです（ハコモノ/不動産世代と私は名付けております）。路線周辺の土地と建物が大好きです。なぜなら、課税対象である二束三文の草地在、店子付きの金の成る木になっていたからです。しかし、最近は路線価格の下落傾向が全国的に見えるので、これは資産価値が下がって発言力が目減りしています。40～50代が、私の父兄の世代ですが、これは高度経済成長期、バブル期に青春を送り遊び上手が多いです。快樂傾向が強いようです（表層・泡抹世代と私は名付けております）。この人達は、私の祖父の世代（60～80歳代）の直属の部下の世代なのですが、祖父の世代が作った箱物に文化事業を持ち込みます。「絆」とか「人間関係」とか言いながら、世帯持ちが多いので「生活のため」にチケットを売っていたりします。経費でチケットを買います。なぜなら、箱物の利用率を上げると公費の助成が入るからです。それだけです。そのため、なるべく世間で知られたような、人が集まるような、中央で名を売った文化・芸能人が草深い地方にやって来るのはこのためです。地方で政治色の強い人間が、目の前に広がる大自然を差し置いて、「文化」を推進するのは、このためです。普段は、ロクに本を読まないような、酒とテレビで世間を知るような人達です。（テレビは催眠商法の道具と化して、朝から晩まで通販をやっています。いまだに「文化包丁」的な実演販売と「ヤラセ」でしかない声を揃えた驚きの声。）その人達向きに、あんまり物事が分かっていなさそうな、普段の講義では学生が誰も耳を傾けていないような、肩書きだけの「名ばかり識者」の方が公共の電波を使って物が言えるのはそのためです。普段は空洞の地方の箱物に人が入る構図はだいたいこんなのです。馬鹿バカしいのです。地方では公費取りが出来る人間がセレブです。産業を生み出すような技術や知識はありません。あるのは上辺だけの協調性と狭い世間です。孤独死が止まりません。

箱物は地元の高齢者と若者を集めて医療・介護の研修施設にして欲しいのです。「文化」よりも「ゆとり」よりも「職」だと私は普段、申しております。

さらに続けさせて頂きたい。

最近になってようやく、生活保護の医療費無料の制度が取り沙汰されています。私の住む筑豊では、保護費受給者が世襲制で保険点数を切り、医師会が議員を買収して行政指導を回避するという技術が半ば公式化しております。製薬会社の人間も、筑豊地区の何倍も人口のいる福岡市よりも筑豊地区での営業を好む傾向を見せます。なぜか、社会保障費が「打ち出の小槌」だからです。筑豊に住んでいると、医師会と行政と市民が共謀して公費取りを行う慣習が時折、垣間見えます。そのため、生活保護受給者よりも小額の給与しか得ていない介護士が、生活保護受給者の下の世話をしていたりします。介護士の離職率が高いのは当たり前です。低所得で自分の老後が危ういの他人の老後を見ているのです。この本当の意味での、最低給与額を引き上げなければ労働法の存在意義が無くなります。働くよりも生活保護を受給した方が金になる状態を打破できる労働市場を再構築する必要が、高齢化に歯止めの掛からない現代に対処する喫緊

の課題です。

さらには、保険点数の切り過ぎの常習者を、医師会から志願した医師を募って監査役を各地域に配属して、行政指導を速やかに行い社会保障費の切り詰める事などが効果的かと思います。でなければ、日本は、地方末端から社会保障費で破綻して行くのは、これは最早、良識ある方には定見だと思われるのですが……

しかし、こうして公費を食い潰し続けられるのも、日本人口の最大層である「団塊の世代」が高齢期を迎え、年金と公保険を食い潰し尽くすまでです。（これも定見化しています。）制限時間はその辺りである事を、歳を取った世代は知らない振りをしてやり過ぎそうとし、歳が若い世代は薄々、感づいてはいるながら一人で動いてもどうにもならないので無関心を装っています。この世代間の不平等と格差をはっきりと言説にして若年層に因果を含めなければ教育の存在意義はあり得ません。

再度、私の青年月日を申しますと 1980（S55）年生まれの 32 歳です。分別盛りの 30 代初頭です。前の世代にも付いて行っても先倒れが見えていますし、後続する世代は優秀な人間から、新天地を求めて旅立ちます。学生の内に、早い段階から勉強でもスポーツでも都市部のエリート校に引き抜かれます。青田刈りと困り込みの段階は年々、早まっています。事を成すにも周辺に人材がいなければ何も出来ません。

この負の連鎖を止めるのは、多分、バブル破綻以降に就職氷河期を迎えた、団塊の世代の金魚のフンのような、谷間の世代の子供達である私の世代です。思春期の頃に年功序列や終身雇用や一億総中流という希望を諦めた世代です。物事を諦めるのに慣れています。元来、日本人はその国民性として「右に倣えで長い物に巻かれる」習性があるのですが、何の利得も無く、ただ飼い殺しの目に合うために「長い物」に巻かれる程、若い人間は愚かでも無いし、目先だけを見て過ごすには平均寿命が延び過ぎた現代社会でもあるので、若年層の危機感を言語化し共有し、浮動票を組織票に変換する努力を続けなければなりません。少年法を改正して「おおむね 12 歳以上が少年院送致」の義務を負っているのに、県知事選の投票権が 30 歳以上というのは不公平だと思います。義務を負わせる以上は権利を与えなければ、世代間の格差は広がる一方であると思います。格差を生む最大の要因は、無知と諦めと無関心と惰性と自助の精神の欠落と熟慮と熟議の放棄と、絶望を客体化しながらその傾向と対策を図る人間の意思の欠如だと思います。光が闇の中に真っすぐにあるように、希望は絶望の中に存在するのだと思います。社会が代謝障害（鬱病）気味な傾向があるので、私が今まで述べて来たような地方の負の叙述を、一身で考えると自死に向かうと思うのですが、代謝が悪くなる理由を言語化し、それに処置法を与えれば、この日本が 20 年以上、続けている代謝障害も克服できるのではないかと思います。

最後の最後に、ハンス・ヨーンナス著「責任という原理~科学技術文明のための倫理学の試み」から、定言命法を引用したいと思います。

「汝の行為の諸効果が地球上の真の人間的な生活の永続と折り合えるように行為せよ。」